

黒井 千次著

流砂



四六変・224頁・1900円
講談社
978-4-06-513309-5
TEL. 03-5395-5817

富士正晴―いま大阪茨木市に記念館があり、生地の徳島県三好市では彼の名を冠した同人雑誌を出している―は昭和六十二年に七三歳で亡くなったが、その数年、九〇歳を超えていた父親を見送っている。その経緯に触れたエッセイで、葬式を出さねばならぬ息子がこんなにもヨタヨタなのだから全く迷惑な親父だよ、と憎まれ口を書いていた。普段から「健康けっこ」長寿いや」と嘯いていた人だから、こんな諧謔もみな笑って聞いたのである。

ありふれた光景になってしまった。前書きが長くなったが、右はこの『流砂』を読んだ思い出したことの一つだ。ここで語り手でもある主人公は「今や七十歳を越えた自分」と言っているが、同じ敷地内の別屋に住む両親、その父親は「九十代にかかってい」とされてい

と、老父はあっさり承知して、二人で報告書を探し、そのうち父親は入院してしまいが、その留守中、偶然『群棲』家族の三〇年後の姿がこの『流砂』の家族図り、息子は時間をかけてそれを読んでくれた。作家黒井千次はこんなふうに、常に時代に寄り添って問題を考え、都市の常民たちの現在を描き続けている。(かつまた・ひろし 文芸評論家)

『群棲』家族の三〇年後の姿

描き続けられた都市の常民たち

勝 又

浩

これは、改めて数えてみれば既に一昔前の話になるが、その頃の七〇歳は充分に老人だったし、九〇歳は本当に珍しい長寿だった。しかしそれから三〇年余を経た今日、九〇代の父親に七〇代の息子という取り合

これは、改めて数えてみれば既に一昔前の話になるが、その頃の七〇歳は充分に老人だったし、九〇歳は本当に珍しい長寿だった。しかしそれから三〇年余を経た今日、九〇代の父親に七〇代の息子という取り合

この父親はもと検事で、昭和一〇年ごろ仕事の必要から思想犯の扱いについて

この父親はあっさり承知して、二人で報告書を探し、そのうち父親は入院してしまいが、その留守中、偶然『群棲』家族の三〇年後の姿がこの『流砂』の家族図り、息子は時間をかけてそれを読んでくれた。作家黒井千次はこんなふうに、常に時代に寄り添って問題を考え、都市の常民たちの現在を描き続けている。(かつまた・ひろし 文芸評論家)

さし平均寿命が男女ともに八〇歳を越えた今という時代を代表し、象徴している

この父親はもと検事で、昭和一〇年ごろ仕事の必要から思想犯の扱いについて

この父親はあっさり承知して、二人で報告書を探し、そのうち父親は入院してしまいが、その留守中、偶然『群棲』家族の三〇年後の姿がこの『流砂』の家族図り、息子は時間をかけてそれを読んでくれた。作家黒井千次はこんなふうに、常に時代に寄り添って問題を考え、都市の常民たちの現在を描き続けている。(かつまた・ひろし 文芸評論家)

この父親はあっさり承知して、二人で報告書を探し、そのうち父親は入院してしまいが、その留守中、偶然『群棲』家族の三〇年後の姿がこの『流砂』の家族図り、息子は時間をかけてそれを読んでくれた。作家黒井千次はこんなふうに、常に時代に寄り添って問題を考え、都市の常民たちの現在を描き続けている。(かつまた・ひろし 文芸評論家)

この父親はあっさり承知して、二人で報告書を探し、そのうち父親は入院してしまいが、その留守中、偶然『群棲』家族の三〇年後の姿がこの『流砂』の家族図り、息子は時間をかけてそれを読んでくれた。作家黒井千次はこんなふうに、常に時代に寄り添って問題を考え、都市の常民たちの現在を描き続けている。(かつまた・ひろし 文芸評論家)